

大火事(当田町)

明治三十八年九月、ちようど日露戦争のころ、
当田に大火事がありました。

ある日、西はずれの空地でおじいさんがたき火
をしていたら、突然西風が吹いてきて、そばにあ
った木によう(はさの材料、竹や木を積んでわら
でおおったもの)に燃え移りました。驚いたおじ
いさんは手当り次第、そこにあつたくわでたたき
消そうと必死になりました。しかし、消えるどこ
ろかどんどん広がって行き、おじいさんはついに
大声を上げて助けを求めました。

「火事や! 火事や! 助けてくれー。」

これを聞きつけた近くの人々は、昼寝からとび
起きて駆けつけました。

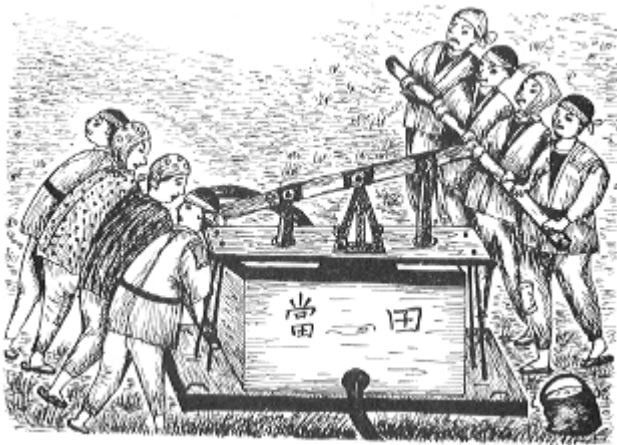
さあ大変、木にようはおるか、そこから飛び火
して民家の屋根がくすぶり始めているではありません



せんか。

すばやくバケツを持ってきて水をかける人、ぬ
れむしろを何枚も屋根に投げかける人、家の中
かけ込んで大事な物を持ち出す人など無我夢中
で。米俵の前でおばあさんが泣いています。若い

衆がその米俵を持ち出そうと持ち上げますが、あ
わてるものだから何度しても肩まで上がりません。
村のポンプも駆けつけて来ました。車からポン
プを降ろし、近くの小川の水を汲み上げますが、



何しろ手押しておしのポンプなので水も細くほそ勢いきも弱くよわ
とつてい火の勢いきいに立ち向かうことは出来ません。
当時は、どの家もわらぶき屋根の小さな木造で
すから火の回りの速いこと速いこと、火の粉がポン
プを押ししている人の頭に降りかかってきます。
「うわあーこりや危ねえぞ。」

身の危険を感じて人たちは、ポンプを置き去り
にして逃げ出しました。

ようやく近くの村々からポンプをひいてたくさ
んの人が応援にやつて来てくれました。何台もの
ポンプがずらりと並んで消化に当たったところ、さ
しもの猛火も下火になって延焼の心配がなくな
りました。我に返った村人たちはやれやれと胸を
なでおろしたもののあととはただばう然と立ちつく
していました。

その時誰かがくすぶっている煙の中に焼け残
っている建物を見つけ、

「道場だー 道場が残っているぞ。」

とさげびました。

見渡せば、西がいちと言われているところ八軒の家が全部焼けてしまっています。置き去りのポンプも燃えてしまいました。それなのに焼け跡の真ん中に道場だけが残っていると、瓦ふき屋根だったからでしょうか、厚い土壁におおわれているからでしょうか、それとも立ち木の陰になっていたからでしょうか。年寄りの人たちは、

「これはきつとつら（私）らの道場として仏さんが守っておくんはつたに違いない。ナムアミ

ダブツ、ナムアミダブツ……」

といつまでも合掌していました。その姿に、途方にくれていた人たちの気持もようやく落ちついて勇氣が湧き上がってきました。

当時の農家はどんなに一生懸命働いても収穫は少なく苦しい時代でした。その上の災害です。でも村人たちはそんな悲しみや苦しみにめげず、お互い助け合って心豊に生き抜きました。

焼け残った道場はそのままずっとそこでお守りされてきたのですが、長い年月の間に建物が大変傷んだので、当田町の公民館が新築された時、中の一室に仏だんを移しかえ、新しく生まれ変わっています。